



5. 電気科学館が話題と なった文献類

5. 電気科学館が話題となった文献類

この章では、電気科学館が紹介された書籍や論文、話題になった小説類など、電気科学館に関係の深い文献類をまとめてみた。



閉館を前にして。小林学

■原口氏雄 「星の話」(1939)、「星と兵隊」(1943)

1. 概要

1.1 星の話

発行年	昭和14年(1939年)12月
発行先	天美堂
著者・編者	原口氏雄
全頁数	136

1.2 星と兵隊

発行年	昭和18年(1943年)9月
発行先	偕成社
著者・編者	原口氏雄
全頁数	210

2. 内容

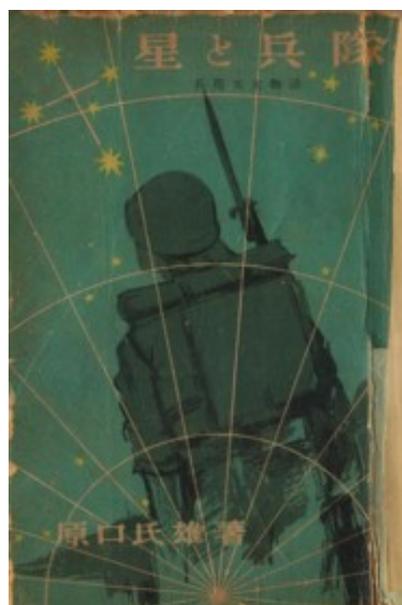
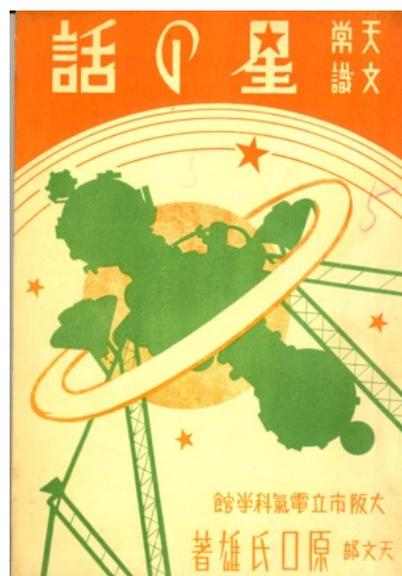
電気科学館初代プラネタリウム解説者の一人だった原口氏雄氏(1909-1995)の手になる天文普及書で、「星の話」には大阪市電気局長木津谷栄三郎、電燈部長川内穂藏、電気科学館長小島康郎らが序文を寄せており、実質的に電気科学館の発行だったと推察される。第4版が昭和16年に発行されており、相当数出回ったようだ。全頁136の小冊子の中に「天文と趣味」、「恒星の世界」、「太陽系の世界」、「実用的な天文学」、「天象儀(プラネタリウム)」の各章が要領よくまとめられている。ちょうどプラネタリウムで扱いやすい分野であることから、解説を補完するという位置づけで書かれたものらしい。

「星と兵隊」には丁寧に「兵用天文物語」という副題がついていて、いやでも時代を感じさせる。原口は「大阪市立電気科学館にあって、天文研究の仕事にたづさわっていた私は、昭和十六年九月、こころ待ちにしていた御召に接することを得て、現役以来十二年ぶりで、再び軍服を身に着けることが出来た」と、はしがきを書き始める。こんな老兵まで動員するのか、と言いたげである。そして、「図らずも私は、南方軍の一兵として大東亜戦争に参加する榮をにない、はるか南十字星下の比島マニラ攻略、バタアン第一次攻略、そして、遠く赤道越えたジャワ勘定の三大作戦に参加することが出来た」と続ける。よくぞ生還できたものである。この時の体験をもとに随筆風に星空探訪を行う。

星の随筆ではすでによく名が売れていた野尻抱影と出合った原口が彼に南方体験を話したところ、出版を勧められて書いたということである。そのため、野尻

が本書にあとがきを寄せている。

小説家火野葦平が1938年に発表した戦記小説「麦と兵隊」が大きな評判を呼び、「花と兵隊」、「土と兵隊」とシリーズになって発表されたことに触発され、「星と兵隊」というタイトルとなったものと思われる。



■織田作之助 「わが町」(1943)、「星の劇場」、「プラネタリウム」

1. はじめに

電気科学館と関係の深い作家と言えば織田作之助(1913-1947)が一番だろう。

織田は大阪市南区生玉前町(現天王寺区上汐町4丁目27)に生まれ、1931年旧制大阪府立高津中学校(現大阪府立高津高等学校)を卒業して第三高等学校に入学した。ところが、卒業を前に病気になり、療養するうちに勉学意欲を失い、1936年、退学してしまった。その頃から創作活動を始め、1940年に発表した「夫婦善哉」(小説)が改造社の第一回文芸推薦作品となり、作家としての地歩を固めた。

2. 「わが町」(1943)

生前、織田と親交のあった映画監督川島雄三は織田の作品を何本か映画化しており、その一つが「わが町」(1943)である。それと関係が深い作品が次に紹介する「星の劇場」である。

「わが町」はベンゲットのタあやんこと、佐度島他吉という無骨な男の物語である。明治39年、フィリピンのベンゲット道路工事に従事していた他吉は警官と争ったため追放され、日露戦争大勝に酔う大阪天王寺のわびしい裏長屋に戻って来た。出航する前夜、情を交したお鶴が初枝という幼子を抱えて苦労していると聞いた他吉はお鶴に代って夜店に出るようになるが、間もなく鶴は病に倒れ、他吉の無頼を案じつつ息を引き取る。

それから20年、大正15年のこと、人力車の棍棒を握り続けて育て上げた初枝は立派に成長、若者新太郎と二世を誓う仲となる。それを聞いた他吉はかんかんになるも、二人を結婚させてやる。だが、家を焼け出されると新太郎は腰抜け同然となり、業を煮やした他吉は彼をフィリピンへ出稼ぎに行かせた。身重の初枝に届いたのは新太郎が死んだという知らせであった。初枝はそのショックで父を恨みつつ死ぬ。



電気科学館でのロケ風景



2006年に日活よりDVD化

5. 電気科学館が話題となった文献類

他吉は車を引きつつ、遺児君枝を必死に育てた。初めは祖父を怖がっていた君江もやがて他吉になつてきた。やがて太平洋戦争が勃発。他吉の心はベンゲットに飛ぶが、それも甲斐なく終戦。他吉も年老いてきた。ある日、君枝は幼馴染の次郎に逢い、愛し合う仲となる。次郎がマニラに行くと知ると、他吉は二人の仲を許した。貧乏長屋では他吉の神経を逆なでする出来事が持ち上がり、他吉は怒って乱闘の末、大怪我をする。自分がフィリピンへ行くつもりで貯めた金を使えと次郎へ遺書を残し、瀕死の身で出かけて行ったのは電気科学館のプラネタリウムであった。他吉の心の中でプラネタリウムの南十字星はベンゲットで見た南十字星に重なった。そこで他吉は静かに息を引き取るのであった。

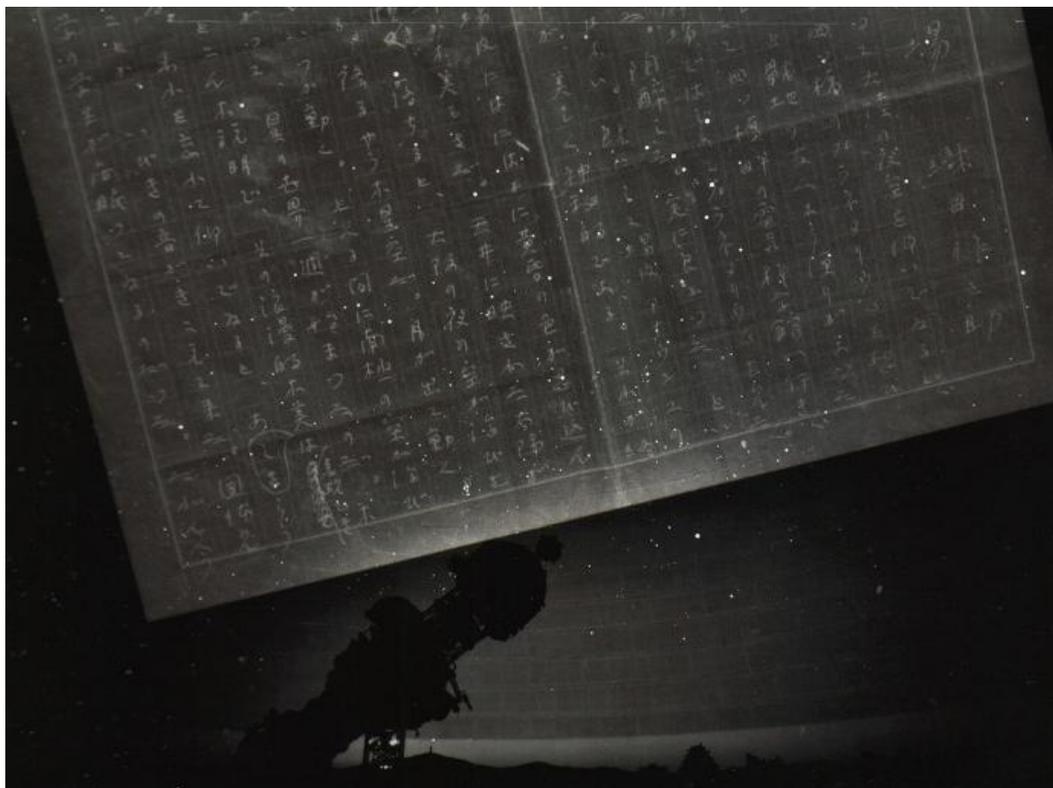
この小説は1956年、君枝役に南田洋子、他吉に辰巳柳太郎、次郎役に三橋達也をフィーチャーして日活で映画化された。最後のプラネタリウムのシーンは小説どおりに電気科学館で撮影された。川島雄三監督の代表的な作品となっており、今でもしばしば映画鑑賞会では上映されている。2006年に日活よりDVD化されたため、手軽に鑑賞できるようになった。

3. 「星の劇場」

「星の劇場」は全集には集録されているものの、初出は不明。「・・・戦地の友人から便りがあったので、周章で四ツ橋畔の電気科学館へ行き、六階星の劇場ではじめてのプラネタリウムを見た。感激した。陶醉した。実に良かった、といふより外はない・・・」という内容を見ると「わが町」のベースになったのではないかと推察される。

「星の劇場」の原稿にはお世話になった。1975年頃だったと思うが、当時、道頓堀に店を構えていた古本で有名な天牛書店の天牛新一郎さんがこの「星の劇場」の自筆原稿を入手したという新聞記事が載った。そこで、早速、辰巳博館長が出向いて行って借り受けてきて、陳列した。下の写真はその自筆原稿とプラネタリウムを重ねて焼いたもので、電気科学館の機関誌の表紙等に使用された。

以下は作品の内容である。原稿用紙2枚の小品である。



「星の劇場」自筆原稿（陰画）

5. 電気科学館が話題となった文献類

「歩哨に立って大陸の夜空を仰いでいると、ゆくりなくも四つ橋のプラネタリウムを想ひだした……」と戦地の友人から便りがあったので、周章てて四つ橋畔の電気科学館へ行き、六階星の劇場ではじめてのプラネタリウムを見た。

感激した。陶醉した。実に良かった、といふよりは外はない。既にして場内アナウンスの少女の声が、美しく神秘的である。それが終ると、場内にはにはかに黄昏の色が忍び込んで、鮮かな美しさだ。天井に映された太陽が西へ傾き、落ちると、大阪の夜の空が浮び出て来る。降るやうな星空だ。月が出て動く。星もいつか動く。と見る間に南極の星が浮びあがって、星の世界一週が始まったのだ。などこんな説明で、その浪漫的な美しさは表現できぬ。われを忘れて仰いでみると、あらうことか、いびきの音がきこえてきた。団体見学の学生が居眠ってゐるのだった。たぶん今は真

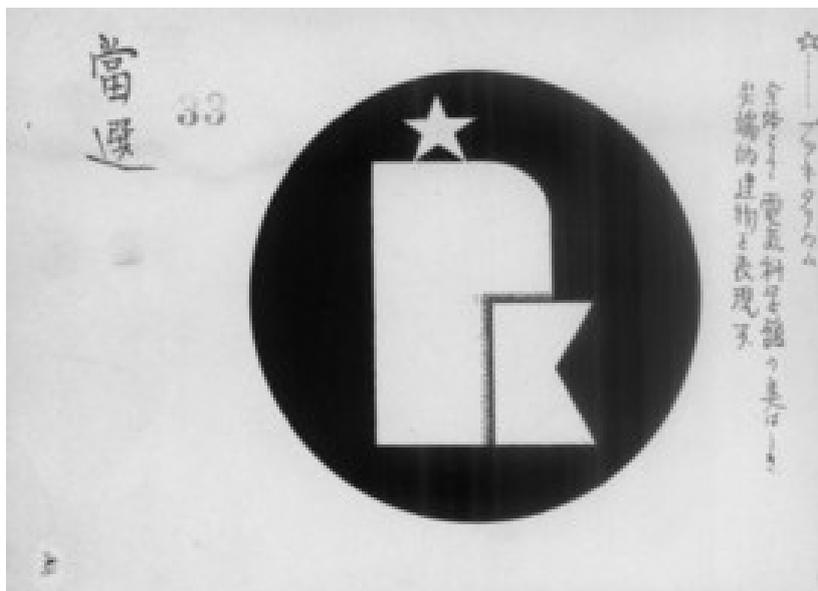
夜中だと感ちがひしたのでらう。それほど、プラネタリウムが映きだす夜のリアリティは真に迫ってゐたのである。

4. 「プラネタリウム」

こうした作品に加えてずばり「プラネタリウム」というタイトルの1000字程度の小品があり、講談社発行の織田作之助全集8（1970年10月12日発行）に収められている。「大阪の詩情を語ろうとすると、どうしても明治臭くなる。大正臭くなる。誰が決めたのか、昭和の大阪には詩がないのかも知れない。」という書き出しで始まり、それならプラネタリウムに行こうというわけで、ドイツ生まれの器械が「大阪の四つ橋へ来て、昭和の大阪の詩情を、瞬かせているのである。」と結んでいる。

電気科学館のロゴマーク

開館に先立ち、ロゴマークの募集が行われ、電気のD、科学館のK、それにプラネタリウムの象徴としての星マークを取り入れた本作品が当選した。このロゴマークは評判が良く、最後まで使用された。残念ながら作者は氏名不詳。



■瀬名秀明 「虹の天象儀」(2001)

1995年、『パラサイト・イヴ』で衝撃的デビューを飾った作家・瀬名秀明氏が渋谷の五島プラネタリウムの閉館を迎え、哀惜の念を込めて仕上げた小説で、プラネタリウムをタイトルに掲げた珍しい作品である。発行は2001年、祥伝社文庫の一冊となっている。

五島プラネタリウムの最後の投影が終わった後、ある少年が訪ねてきた。一風変わった少年で、解説員の主人公にプラネタリウムについていろいろ質問してきた。主人公が答えていると、少年はプラネタリウムを覗いていると、タイムスリップするような気がしないかと問いかけてきた。その言葉を受け、主人公が投影レンズを覗き込むと、どこか遠いところへ飛んでいきそうな感覚になり、気がつくと、そこは戦時下の銀座だった。とまどいながらさまよっていると、足はある大きなビルに向かっていく。それは、戦前、唯一東京にあったプラネタリウム—東日天文館だった。そこで出会った人が手がかりに、主人公は「会いたい人」を探し始める。それは今、まさに逝かんとする作家・織田作之助であった。織田の「思いが残る」という言葉が五島プラネタリウムと、それらを取り巻く人々を繋ぐ言葉となった。時空を越え、人を越え、「思い」は受け継がれてゆく。

作者は「わが町」でプラネタリウムを小説の大事な場面に登場させた織田作之助にも暖かい視線を送る。この小説を読む時、織田作之助の「わが町」とそれが描かれた電気科学館プラネタリウムを知らないと、「なぜ、織田作が登場するの?」となってしまう。電気科学館、東日天文館、そして五島プラネタリウムという

流れと繋がりが背景にあり、作者はそれを強く意識しているからである。

この小説によって織田作之助を知ったという読者も多い。戦前、東京にプラネタリウムがあったことを知らない世代が増えていることでもあり、作者瀬名秀明氏の功績は大きいと言えよう。



■高城武夫 「プラネタリウムの話」(1954)

1. 概要

発行年	昭和29年(1954年)3月
発行先	大和書房(大阪府吹田市)
著者	高城武夫
全頁数	157

2. 本書について

電気学館プラネタリウムの初代解説者だった高城武夫(1909-1982)の編著になるプラネタリウムについての解説書で、その歴史、構造、演出、教育、自作法まで広範に扱っている。恩師山本一清、宮本正太郎京大教授、小島康郎元館長が序文を寄せ、プラネタリウム解説者の佐伯恒夫、神田壹雄、戸田文夫と館長田中六郎も寄稿し、挿絵は後の館長中村が担当しており、電気科学館挙げての執筆であった。



3. 高城武夫について

高城武夫はわが国プラネタリウム界の真のパイオニアである。

電気科学館の開館当時(昭和12年)、高城は京都大学花山天文台で保時作業に従事していたが、大阪市がプラネタリウムを導入する際に花山天文台の山本一清

教授にアドバイザー役を依頼した関係から、山本の要請を受けて天文学の専門家として異動し、わが国最初のプラネタリウム解説員となった。当時、山本一清は東亜天文学会の育成・指導に奮闘していたため、傍らにいた高城は会の事務も司っていた。そんな関係があったため、高城が大阪に移ると電気科学館は自然に東亜天文学会大阪地区のセンターとなった。

昭和18年2月の北海道日食では大阪市観測班を率いて遠征し、コロナの「天然色写真」撮影に成功した。戦後の米国視察団やマッカーサー夫人と子息への英語での解説、義宮殿下(現常陸宮)への対応などを担当し、プラネタリウムの主任として運営の中心となっていたが、在職15年の後、昭和27年に退職した。

その後、郷里和歌山で自ら和歌山天文館を立ち上げ、和歌山県で唯一のプラネタリウム館として長らく天文教育に奔走し、旺盛な執筆活動を行なった。

2002年、筆者は小林隆男氏(群馬県大泉市)が発見された小惑星に固有名を提案する機会に恵まれた。そこで、高城を顕彰すべく Takagitakeo を提案したところこれが認められ、発見名 1993XR の小惑星は 8199 番 Takagitakeo と命名された。以下はその時の命名提案理由である。ただし、1939年に勤め始めたとしたのは誤りで、1937年の開館時が正しい。

(8199) Takagitakeo = 1993 XR

Discovered 1993 Dec. 9 by T. Kobayashi at Oizumi.

Takeo Takagi (1909-1982) played an active part in astronomical education as one of the first planetarians in Japan. In 1939 he joined the staff of the Osaka Electric-Science Museum, famous for its 1937 installation of the first planetarium in Japan. After retiring from the museum, he opened a private planetarium.

4. 構成

序 山本一清、宮本正太郎、小島康郎

1. ふしぎな「星の劇場」
2. 大阪プラネタリウムの見学
3. プラネタリウムが生れるまで
4. すばらしい発明
5. ドイツとヨーロッパの天象館
6. アメリカの天象館めぐり
7. 大阪プラネタリウムの建設

5. 電気科学館が話題となった文献類

- 8. わが子より可愛い機械
 - 9. 天象館の仕事
 - 10. プラネタリウムの演出 (附 話題集)
 - 11. 演出と解説の方法
 - 12. プラネタリウムに現れる天文 (佐伯恒夫)
 - 13. プラネタリウムの種明し
 - 14. プラネタリウム機械の構造 (I) (神田壹雄)
 - 15. プラネタリウム機械の構造 (II) (戸田文夫)
 - 16. プラネタリウムの重要な機構
 - 17. 簡易天象儀
 - 18. 桐蔭式プラネタリウム (山本達郎)
 - 19. 天文教育とプラネタリウム
 - 20. 将来のプラネタリウム
 - 21. 天象館の特別ショー
 - 22. アドラー天象館見学記 (田中六郎)
- 附録 (工作) 自分で出来るプラネタリウム

自慢は八層の“防空館”

昭和10年(1935年)3月22日の大阪日々新聞は「自慢は八層の“防空館”に」と題する記事を掲載した。展示場には見るべきものがないと思ったか、新しい電気博物館の自慢は“防空館”と書いている。プラネタリウムは自慢のタネになるはずだが、プの字も見えない。実はここで紹介されているのは、1ヶ月前に決定された第2次案であつて(本章「わが国最初のプラネタリウム」(加藤賢一)に関連事項がある)、プラネタリウム導入決定以前の報道であつた。

大阪市電燈部が六十九萬圓の巨費を投じて昨年六月以来四ヶ層に建設中の電気科学博物館は、竣工も近づき、その際、近代的な姿を早急の長瀬川の水に映し出し、今自慢を待たばかりとなり。

電燈 部では開館準備に忙しかつてゐるが、同部では本館の使命の重大なるに鑑み、陳列

因に同館は建築二百坪、延床千七百坪で、窓の如きモダンな鉄骨鉄筋コンクリート建、地下一層、地上七層、遊園八層、計十六層といふ、現地に稀なる高層建築で、地階は食堂、電気機械室、一階は陳列所(遊園店)、電気料蔵所、電器器具試験室、二階乃至五階は博物館で電気科学の普及を目的とする。

四階 は電力電報館、五階は無線電報館で、之に圖書室及講堂が附設されてゐる。また六階はアイススケート場、七階はスケート場、八階は屋上遊歩道、九階はスケート場、屋上となつてゐる。斯く同館は電気知識の普及を目的とする外、食堂、陳列所、スケート場をも營営して電気科学館の中心となるもので、軍備上にも重大なる役割を演ずることとなつてゐる。

防空教育の陳列、燈火警報司令室、燈火警報機、至幸が書けられ、大阪防空館の

核心 となるもので、軍備上にも重大なる役割を演ずることとなつてゐる。

■自慢は八層の“防空館”に■

竣工 近き 電気科学館

電気博物館 陳列所の外に 食堂 スケート場も経営